

徳島・敷地遺跡^{しきじ}

1 所在地 徳島市国府町敷地字鶴ノ本

2 調査期間 一 二〇〇二年度調査 二〇〇二年(平14) 四月
二 二〇〇三年三月

二 二〇〇三年度調査 二〇〇三年四月～二〇〇四年三月

3 発掘機関 (財)徳島県埋蔵文化財センター

4 調査担当者 一 木村哲也・森岡基司・川村哲夫・梶河智江
二 大橋育順・宮本 格・井藤良雄・槌谷久代
森岡基司・篠原久仁子・武中宏之・林 賢彦

庄司俊也・須崎一幸

5 遺跡の種類 集落跡・

水田跡・自然流路

6 遺跡の年代 古墳時代

室町時代

7 遺跡及び木簡出土遺構

の概要

敷地遺跡は吉野川と鮎喰

川によって形成された沖積



(川 島)

平野上の標高五～六mに位置し、徳島環状線の建設に伴って一九九八年度から発掘調査を実施している。遺跡の中央部を西大堀川が東流しており、その両岸に微高地が形成されている。この微高地上で古墳時代後期から古代までの集落が検出された。また、周辺の低地部分は平安時代初頭の段階で、水田区画が形成されていたことも明らかになった。

旧西大堀川北岸の薄い堆積層から、柿経が出土した。柿経は、一五世紀後半から一六世紀前半までに埋没したと考えられ、束状のまとまりを中心に、水流の影響を受けて周囲に散乱したと考えられる。周辺の調査区では同時期の遺構は見られなかったが、同じ自然流路の堆積層からは、卒塔婆や土師質土器の杯、明銭などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「三界法王位義利施故得一切意願満足以 五」
275×11.6×0.5 011

(2) 法施故得円満一切法資生施故得身口意
(268)×11.6×0.4 019

(3) 「一切安楽時虚空蔵大菩薩欲重顕明此義」
278×11.6×0.5 011

(4) 「故 怡微笑以金剛寶鬘自繫其首説一切」
278×11.8×0.5 011

(5)	「灌頂三摩耶寶心」	278×12.4×0.6	011
(6)	「 ^(タ) 永」	280×12.3×0.6	011
(7)	「時薄伽梵得一切如來智印如來復說一切」	278×12.4×0.5	011
(8)	「如來智印加持般若理趣所謂持一切如來」	278×11.6×0.6	011
(9)	「身印即為一切如來身持一切如來語印即」	279×11.8×0.6	011
(10)	「得一切如來法持一切如來心印即證一切」	279×12.0×0.5	011
(11)	「如來三摩地持一切如來金剛印即成就」	279×11.8×0.5	011
(12)	「切如來身口意業最勝悉地金剛手若有聞」	280×11.6×0.6	011
(13)	「此理趣受持誦誦作意思惟得一切自在」	279×12.0×0.6	011
(14)	「切智智一切事業一切成就得一切身口意」	280×11.6×0.6	011
(15)	「金剛性一切悉地疾證無上正等菩提時薄」	281×11.6×0.5	011
(16)	「摩耶加持三摩地說一切不空三摩耶心 八」	(258)×13.0×0.4	019
(17)	「 ^(タ) 永」	(268)×12.6×0.4	019
(18)	「時薄伽梵如來復說一切有情加持般若理」	(278)×12.5×0.3	019
(19)	「趣所謂一切有情如來藏以普賢菩薩一切」	275×13.0×0.5	011
(20)	「我故一切有情金剛藏以金剛藏灌頂故」	278×12.4×0.4	011
(21)	「切有情妙法藏能轉一切語言故一切有情」	(275)×13.0×0.6	019
(22)	「羯摩藏能作所性相應故時外金剛部欲」	275×13.0×0.4	011
(23)	「尔時末度迦羅天三兄弟等親礼仏足献自」	278×13.0×0.5	011
(24)	「心真言」	278×12.0×0.3	011
(25)	「 ^(タ) 永」	(212)×11.2×0.4	081
(26)	「尔時四姊妹女天献自真言」	280×11.0×0.5	011

(27) 「般若理趣經」

274×120×0.5 011

(28) 「 宗永禪門 也」^{〔之カ〕}

167×33×4 061

(29) 「南無阿弥陀仏」

145×9×0.5 011

二〇〇二年度、二〇〇三年度調査で、柿経は小破片を含めて二八九点出土し、このうち文字を判読できたものは七六五点である。

これらは概ね、長さ約二八cm幅一・二cm厚さ〇・五mmの薄い檜の柾目板を素材にしている。その多くが薄い色調できめ細かい材質のものであるが、色調が濃く目の粗い材質のものも混在する。上端部は鋭角な圭頭状を呈し、これが本遺跡の柿経の特徴であると考えられる(23)(24)(26)。圭頭の左右の斜辺の長さが違うものが多く見られ、先端部の形状が一致する例もある。また、先端にわずかな平坦部が残っているものもある(24)。切り欠きや五輪塔状の加工はない。末端部にも加工は見られなかったが、末端の両端の角を落したものが数点あった。厚さは均一ではなく、特に裏が透けるほど薄く、製作当初から破れていたと思われる部分もあった。文字が書かれた面は滑らかであるが、裏面はささくれが目立つ。

写経された経典は九割以上が「般若理趣經」(大樂金剛不空真実三摩耶經。大正新脩大藏經二四三)であり、「法華經」は一〇点以下で、これらの大多数が片面写経である。原則として一枚に一七文字書か

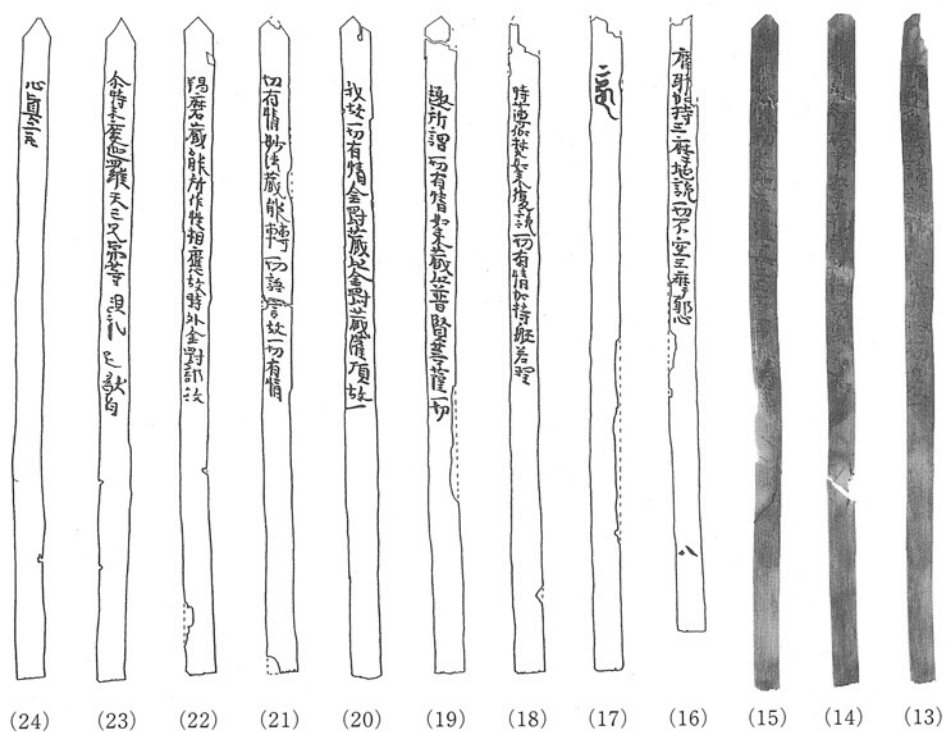
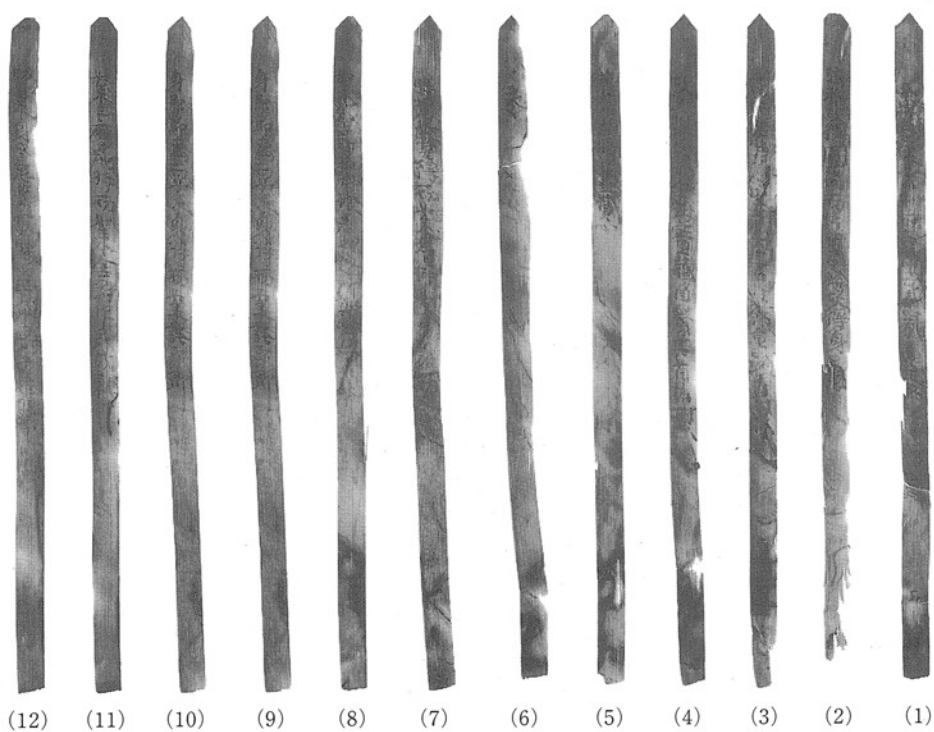
れ、二〇枚ごとに下部に漢数字がふられているが、下部を紙綴などで縛った痕跡は見られなかった。

その他、「南無阿弥陀仏」と名号を書いたもの十数点が出土している(29)。柿経と同じく先端部が圭頭状を呈しているが、全長が短い特徴がある。

「般若理趣經」は、密教儀礼の「理趣三昧」として盛んに写経されたといわれている。経典は、導入部分(序分)と最後の宣伝部分(流通分)を除き、一七段で構成される。今回出土の柿経の中には、「般若理趣經」の同一部分が複数含まれており、少なくとも四組以上あったと考えられ、複数の筆跡も見られる。

柿経は追善供養のために作られたと考えられているが、出土地点の周辺では同時期の建物跡は見つかっていないため、供養主体や埋没に至る経緯などは、今後の課題である。

(1)~(15)は、「般若理趣經」第五段三行目~六段九行目である。(1)は経文の下に「五」が書かれていて、五束目の最初の一枚と考えられる。(6)にキ(タラシ)があり、ここで段が分かれている。(16)~(22)は同第一二段七行目~二段目五行目、(23)~(26)は同第一四段と一五段の一行目である。(16)の下には「八」が見える。(17)にはキ(ウシ)、(25)にはキ(ソハ)が書かれている。(24)が三文字であるのは、一四段が梵字を除いて二〇字しかないためであり、(26)が一四文字であるのも、一五段が梵字を除いて一四字で構成されているためであ

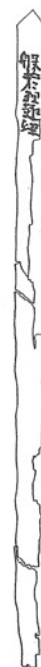




(25)



(26)



(27)



(28)

る。(27)は『般若理趣經』流通段最後の部分で經典名のみ書かれている。(2)(16)~(18)、(25)は上端を欠いているが、内容及びその長さから、文字は欠けていないと思われる。(28)は卒塔婆で、戒名と考えられる文字が中央から下半分に見える。上端を尖らせて二対の切り込みを入れ、末端部も細く整形されている。

なお釈読にあたり、京都教育大学の和田萃氏のご教示を得た。

9 関係文献

〔徳島県埋蔵文化財センター〕『徳島県埋蔵文化財センター年報一四二〇〇二年度』（二〇〇三年）

同『徳島県埋蔵文化財センター年報一五二〇〇三年度』（二〇〇四年）

（大橋育順）

『木簡研究』在庫状況のお知らせ

頒価

一~四・七号	品切れ	五・六号	三五〇〇円
八~一二号	三八〇〇円	一三号	四三〇〇円
一四・一五号	四五〇〇円	一六~二三号	五五〇〇円
二四・二五号	五〇〇〇円	(五・六号は残部僅少)	

送料

一冊	六〇〇円	二冊	八〇〇円	三冊	一〇〇〇円
四冊	一二〇〇円	五~一〇冊	一五〇〇円		
一一~二〇冊	二〇〇〇円				

◇個人でのお求めは代金前納です。代金と送料を郵便振替
〇一〇〇〇一六一一五二七 木簡学会
までお送りください。

◇公的機関の場合は代金後納で結構です。

左記の銀行振込か右記の郵便振替でお願いします。

口座番号 みずほ銀行西大寺出張所

普通預金 一一一〇三一五

口座名 木簡学会 佐藤宗諄（さとう そうじゅん）

お問合せは左記へどうぞ

〒六三〇一八五七七 奈良市二条町二一九一

奈良文化財研究所平城宮跡発掘調査部史料調査室気付

木簡学会

電話 〇七四二一三〇一六八三七